

平成23年度大学院学位記授与式総長式辞

本日ここに大阪大学の修士／博士の学位記授与式に臨まれた皆さんに、心よりお祝いを申し上げます。また、幼少の頃からこれまで、皆さんの勉学を支えてこられましたご家族の方々の長きにわたるご苦勞に対しましても、心より敬意を表したく存じます。

皆さんは、本日晴れて修士や博士の学位を取得され、今後社会の様々な分野で、その培った知識と経験に基づき活躍することが期待されています。一人一人が、それぞれの思いを抱きこれからの進むべき道に夢を膨らませておられることと思います。

私が皆さんに期待することがあります。それは、いかなる分野に進もうとも、常にその分野を極めていただきたい、その分野の信頼されるリーダーに成っていただきたい、そのために、誰にも負けない知識と経験、技量を積み、成果をあげるべく日夜励んでいただきたいということです。

これまで学んで来られたことは、まだ学問や科学のほんの一端に過ぎません。言い換えればまだ入口に差し掛かったところと言えるでしょう。これからの長い道のりを、切磋琢磨し新しいことに向かって常に挑戦していただきたいと思います。

また皆さんの心に是非とも刻んでいただきたい言葉があります。それは「ノブレス・オブリージュ (Noblesse oblige; noble obligation)」という言葉です。「高貴さは責務を伴う」というような意味です。すなわち選ばれた人には、それに相当する責務が求められるということです。ノブレス・オブリージュについて皆さんと一緒に考える前に、少し大阪大学の歴史、皆さんの先輩が歩んで来られた長い道のりをお話したいと思います。

大阪大学では、大学は「学問と教育の府である」、アカデミズムを追求することこそが、我々大学人に課せられた使命であるという理念のもと、「日本だけではなく世界の学術のリーダーたるべきである」という高い志をもって、さらなる飛躍をはかる努力を行ってきました。そして、今年、大阪大学は創立80周年という節目の年を迎えました。「大阪にも帝国大学を」という地元大阪府民の熱意と、当時の大阪府立医科大学長の楠本長三郎や大阪府知事の柴田善三郎ら関係者の努力により、1931年、医学部と理学部の2学部からなる「大阪帝国大学」が、長岡半太郎初代総長の下、我が国第6番目の帝国大学として誕生しました。

江戸時代末期、緒方洪庵が「新知識をもって世の中の人を救う」ことを目的に私塾として設立した「適塾」の自由な学問的気風と先見性は、大阪府立医科大学を経て、医学部と理学部へと繋がります。翌々年には大阪工業大学が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学と国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。新制大学としてスタートした際には、法文学部を文学部と法経学部に改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。

大阪外国語大学の前身である大阪外国語学校出身の司馬遼太郎が小説「花神」の冒頭で、適塾を大阪大学の「前身」、緒方洪庵を「校祖」と表現しています。このように、「適塾」を原点として、「懐徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、2004年の国立大学法人化、2007年の大阪外国語大学との統合を経ながら、我が国を代表する総合大学として、世界に向かってたゆみなく発展を遂げて参りました。そして幾多の優れた研究者、教育者、文化人、そして政財界など各界の指導者や卓越した人材を世に輩出してきました。大阪大学は、創立80周年を機に「原

点へ・未来へ」をタイトルに掲げ、大学のあるべき姿をその原点に見出し、その原点に立ち未来へ飛躍しようとしています。

一方、わが国の歴史を紐解くと、150年ほど前の江戸時代末期には、安政の東海地震や南海地震、江戸地震と三つもの大きな地震が日本を次々と襲う中、当時は国外からの開国の圧力もあり、江戸300年の太平の世に甘んじていた江戸幕府率いる時の政府は、なす術を知らず国の存亡の危機を迎えました。このとき、土佐藩の坂本龍馬はじめ適塾出身の福沢諭吉や大村益次郎などの若者が大活躍し、明治維新の国難を乗り越え近代化を果たすことができました。

66年前には第二次世界大戦に敗北し、またもや国家存亡の危機を迎えましたが、奇跡とも言われる戦後復興を見事に果たしました。

そして、今3度目の危機を迎えています。3月11日に東日本大震災が日本を襲い、さらに追い打ちをかけるように原子力発電所の重大な事故が起きました。現実とは思えない悪夢からすでに6ヶ月が経っても、なお多くの地域が復興の見通しが立たずにいます。この危機を乗り越え、日本が再び明るい未来を切り拓くことができるか否かは、若い皆さん一人一人の双肩にかかっています。

我が国が存続・発展していくためには、学術や科学技術の振興が不可欠です。市民に信頼される学術・科学技術の振興なくして、革新的な技術開発や心豊かで平和な社会の発展はありえず、社会が皆さんに求めているところは、大阪大学で養われた知的創造活動としての基礎研究や応用研究の更なる推進です。あるいは、様々な分野で責任あるリーダーとして社会に対する責務を果たすことです。このようなことは本学で研鑽を積み重ねた皆さんだからこそ成しうることです。これこそが「ノブレス・オブリージュ」です。皆さんは、伝統ある大阪大学で学んだ者として、大いなる誇りを持って世に出ていただきたいと思います。と、同時に、皆さんの責務を立派に果たしていただきたいと思っています。

辛いことが続いている今年の日本ですが、なでしこジャパンの活躍で日本中が沸きかえました。なぜ人々はオリンピックや世界選手権などのスポーツ選手の活躍に感激するのでしょうか？ 人々は、彼らが日頃汗水流して築き上げた素晴らしい技、技術に感動し、一つ一つのプレーに拍手を送ります。しかし単にそれだけでしょくか？

私は見事なプレーに潜む“ひたむきな心”に人々は拍手を送り、感激するのだと思います。ただひたすら、日頃のトレーニングの成果を体全体で表現する、その純粹さと情熱、そして技術の高さが一体となり、そこからふつふつと湧き上がる、“心の震え”が、人々を虜にするのだと思います。言い換えれば子供のもつ純真な心、子供の目の輝きにも似ていると思います。何事も不可能を可能にする、子供のもつ力だと思っています。

誰しも子供の時は、夢を持ちます。理想を心に抱きます。しかし、夢や理想は現実とあまりにもかけ離れており、それを容易には手に入れることができません。永遠に不可能とすら思えます。だからこそ夢であり、理想であるのです。人々は成長するにつけて、多くの厳しい現実を経験し、夢と現実の乖離の大きさを実感するに従い、一つ一つ夢を失って行きます。そして子供のもつ純粹さ、目の輝きを失って行きます。そして気がつけば当たり前前の大人になってしまっています。そのような現実社会の中で、子供の心を見事に表現してくれるのが、スポーツの世界であると思います。人々は戦う選手の高い技術に裏打ちされた「ひたむきな心」に、子供の頃の夢を見だし感激するのだと思います。

皆さんにあり、私に無いもの、それは未来という無限の可能性です。そしてこれは、とりもなおさず子供のもつ純真さ、夢、目の輝きです。

これから皆さんは、企業や行政機関など第一線で活躍する社会人として、あるいは各種教育研究機関で次世代の人材を育成する教育者として、あるいは未来を切り開く研究者として、そして一人の人間として、長い人生を送られるわけですが、いつまでも“夢”を失わないでいただきたい。今の感激を忘れることなく、一瞬一瞬を大事にして、大いなる夢を持って輝ける未来に挑戦していただきたいと思います。

最後になりましたが、皆さんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたしの式辞といたします。

本日は誠にありがとうございます。

平成23年9月20日
大阪大学総長 平野俊夫